

第3章 光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

光構内は山口県光市大字室積浦に所在する。同構内およびその周辺では遺物包含層中から縄文時代から室町時代にかけての遺物が出土しており、「御手洗遺跡」として周知されていた。しかし、平成2年度に同構内の北部および北西部で実施した、光小学校運動場改修に伴う発掘調査で6～7世紀の土壌5基が検出され、光構内での遺構の存在が初めて確認されたとともに、砂層を検出面とする遺構が分布することが明らかとなった。

今回の調査は、光構内の南端部の地域に選定された光中学校武道館の新営計画に呼応するものである。新営予定地周辺では平成2年度に小学校運動場改修に伴い小規模な試掘調査を行っており、表土直下の暗褐色砂層から土師器、須恵器、歴史時代土師器、国産陶磁器、剥片などが出土している¹⁾。しかし、調査地域が光構内の背後にせまる峨嵋山の谷あいの延長部分にあたり、調査前の降水による激しい湧水のため、掘削を途中で断念せざるをえない状況であった。したがって、当該地域の埋蔵文化財の内容、形態、分布状況や時期などについてこれまで十分な調査成果は得られていないのが現状であった。

調査は人文学部考古学研究室の協力を得て、新営予定地の中央部に新営建物の長軸に沿って、幅約1.5m、長さ約25mのトレンチを設定して行った。その結果、遺物包含層から歴史時代土師器、土師器質土器、国産陶磁器などが出土し、また、その下位の堆積層を検出面とする土壌2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基を検出した。各遺構からの出土遺物はなく、また、その上位に堆積する遺物包含層には大きく時期の隔たる遺物が混在していることから、遺構の時期は決め難い。

調査期間は、平成3年12月2日から13日までで、調査面積は約38m²である。

2 層位 (Fig.9, PL.6)

調査区の西側約5分の2は光中学校の前身である、旧山口県女子師範学校当時攪乱によって大きく破壊を受けて

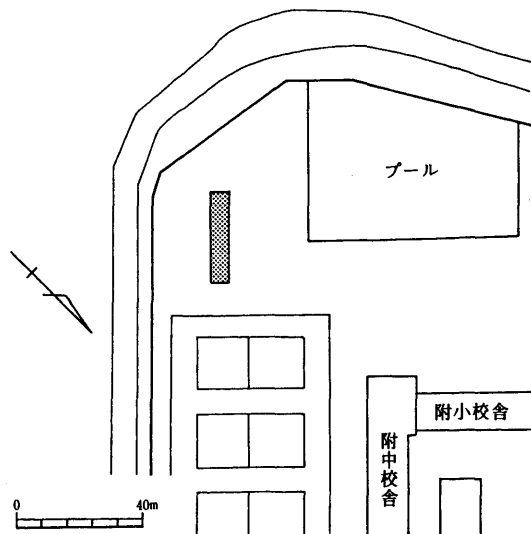


Fig. 8 調査区位置図

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査

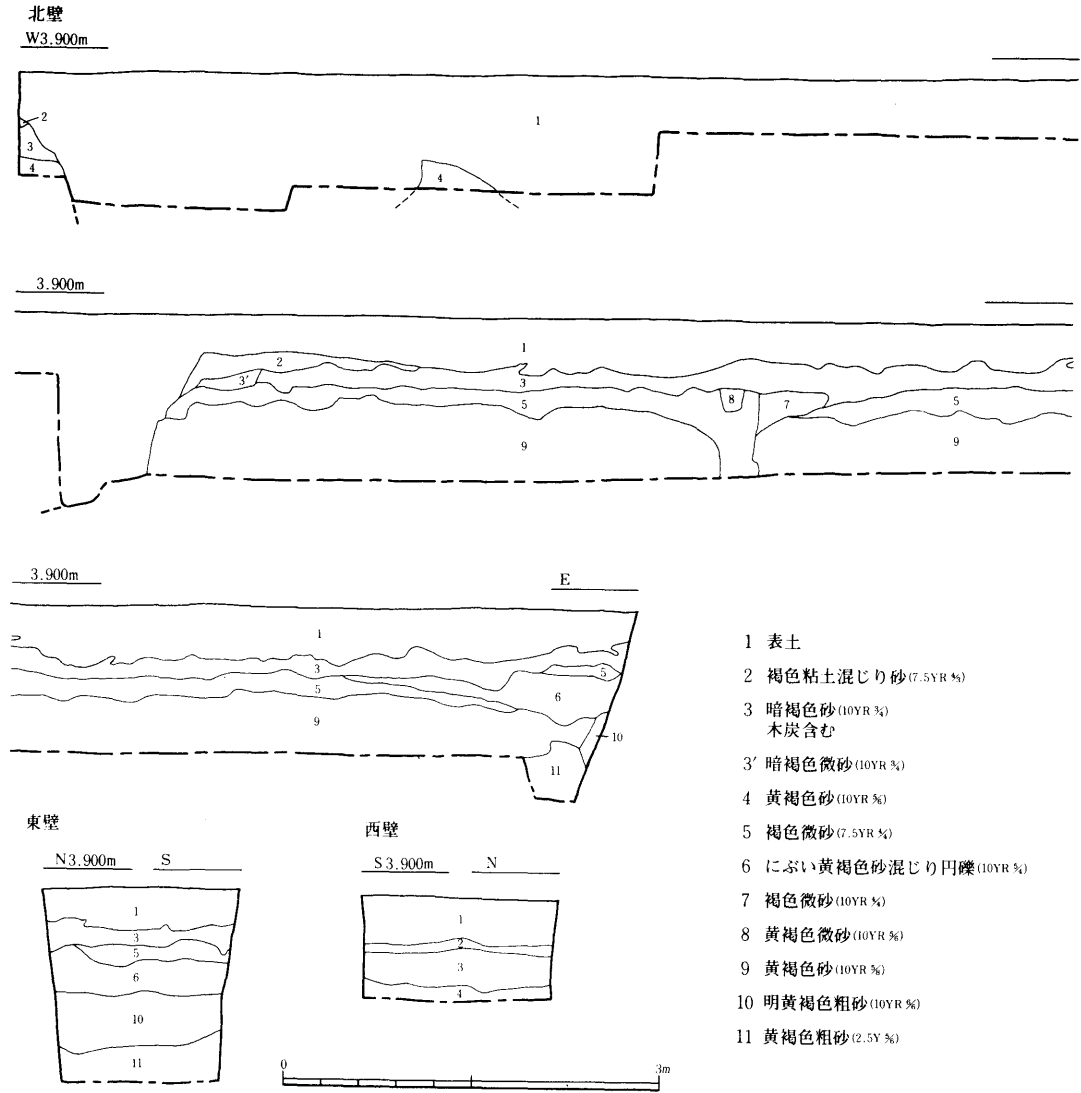


Fig. 9 土層断面図

いる。表土（構内造成による埋め土）は現地表面から約35～45cmの厚さに客土されており、その下位には、木炭を含む第3層：暗褐色砂が堆積している。同層は光小学校運動場改修に伴う試掘調査ですでに確認している堆積層で、最大30cm、平均10～15cmの堆積厚をもつ。調査区西半部では局所的に第3層上面には第2層：褐色粘土混じり砂が最大で約20cmの厚さに堆積している。その下には層厚約15～20cmの第5層：褐色微砂、第6層：にぶい黄褐色砂混じり礫がみられ、無遺物層である第9層：黄褐色砂や第10層：明黄褐色粗砂へと連

層位・遺構

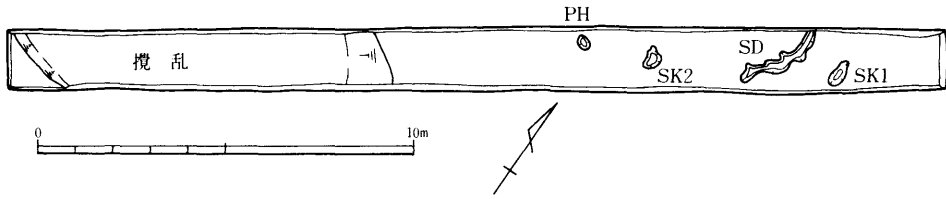


Fig. 10 遺構配置図

続する。第9層は土壌、溝状遺構、柱穴状遺構の検出面である。

なお、調査区中央部付近で第5層への第8層：黄褐色微砂の落ち込みがみられたが、平面では確認することができず、遺構かどうかわからなかった。遺物包含層は第2層、第3層で歴史時代土師器、土師器質土器、施釉陶器、磁器などが出土した。

3 遺構 (Fig.11~14, PL.5・6)

第9層：黄褐色砂層を検出とした土壌2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基がある。

土壌

第1号土壌 (Fig.11, PL.5)

調査区の東端部に位置する。平面形態は楕円形状を呈し、長軸79cm、短軸37cm、検出面からの深さ20cmの規模をもつ。断面形は播鉢状で、壁面は底面からゆるやかに立ち上がる。北西部には底面から約10~15cm上位に二段の階段状の平坦面をもつ。検出面の標高は3.65~3.7mで、長軸方向はほぼ北-南。埋積土は黒色砂。

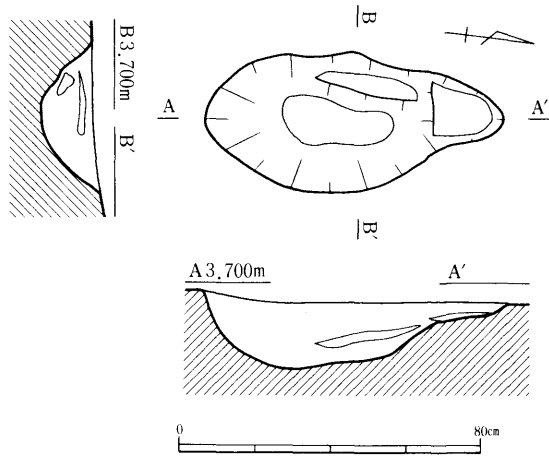


Fig. 11 第1号土壌実測図

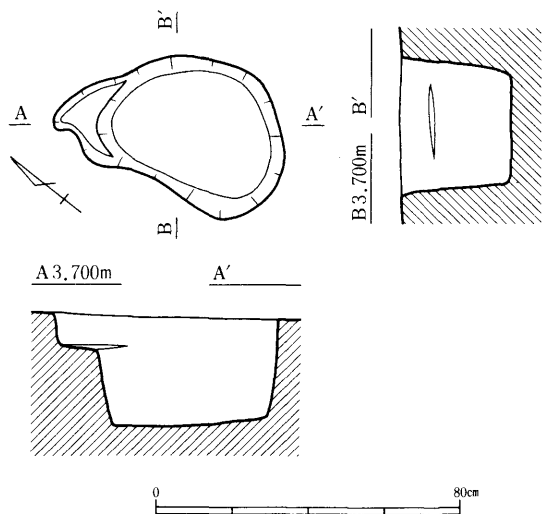


Fig. 12 第2号土壌実測図

出土遺物はない。

第2号土壙 (Fig.12, PL.5)

調査区の東部、第1号土壙の南西約4.5mに位置する。平面形態は楕円形状を呈し、長軸59cm、短軸36cm、検出面からの深さ25~30cmの規模をもつ。断面形は逆台形で、壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。北西部には底面から約20cm上位に階段状のせまい平坦面をもつ。検出面の標高は約3.6mで、長軸方向はほぼ北西-南東。埋積土は黒色砂。出土遺物はない。

溝状遺構 (Fig.13, PL.6)

調査区の東部、第1号土壙と第2号土壙間に位置し、北東-南西に走行する溝である。北への延長部分は調査区外にあたるため検出していないが、検出長は約2.4m、幅約15~30cmの規模をもつ。断面形は逆台形に近く、検出面からの深さは約10cmと極めて浅い。検出面は標高は約3.6m。埋積土は黒色砂。出土遺物はない。

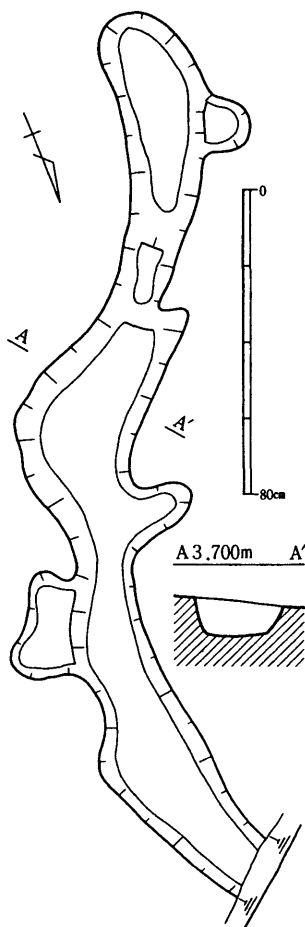


Fig. 13 溝状遺構実測図

柱穴状遺構 (Fig.14)

調査区の中央部からやや東、第2号土壙の西約1.5mに位置する。平面形態は楕円形状を呈し、長軸35cm、短軸25cm、検出面からの深さ10~15cmの規模をもつ。断面形は逆台形で、壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。検出面が砂層であることから、柱穴状遺構と呼ぶには問題があるかもしれない。検出面の標高は3.55~3.6mで、長軸方向は北西-南東。埋積土は黒色砂。出土遺物はない。

4 出土遺物 (Fig.15, PL.6)

歴史時代土師器の坏・皿・台付皿、土師質土器の鍋、施釉陶器の鉢、磁器の碗・皿などがあるが、量的には少ない。

1は歴史時代土師器の台付皿の底部で、側面は大きく外方に開く。2~5は磁器。2は内湾しながら直立する口縁部をもつ碗で、外面には2条の圈線が巡り、その間に木の葉などの草木を染付する。3、4は同一個体と考えられる碗。5は内面に

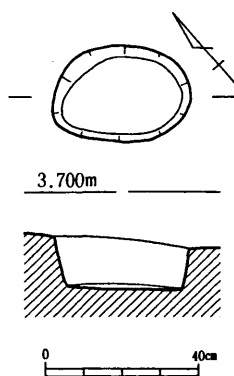


Fig. 14 柱穴状遺構実測図

小 結

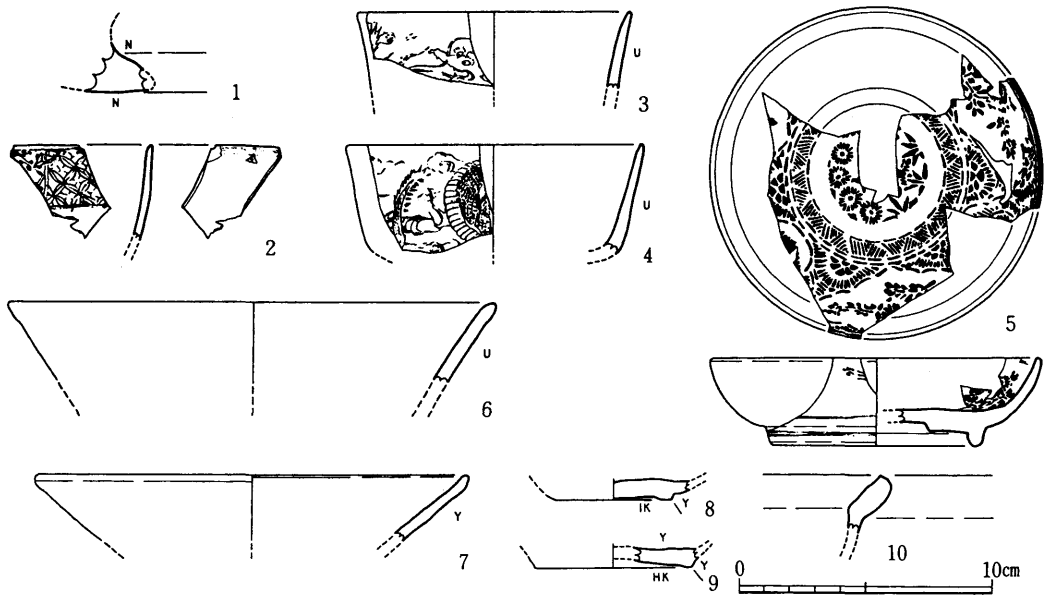


Fig. 15 出土遺物実測図

草花を染付する皿。6は口縁部が直線的に開く施釉陶器の鉢。7～9は土師器。7は坏で、体部が直線的に立ち上がる。口縁端部の外面はわずかに肥厚し、内面はヘラによる押圧によって部分的に面を作り出す。内外面とも丁寧に横ナデされる。8・9は糸切り底の皿の底部。10は土師質土器の鍋で、口縁部は短く斜外方へ折れ肥厚する。1～4・6は第2層、その他は第3層出土。

5 小結

今回の調査では、遺物包含層や土壌2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基を検出した。各遺構からの出土遺物はなく、また、その上位に堆積する遺物包含層には大きく時期の隔たる遺物が混在していることから遺構の時期はにわかに決め難いが、これまでの光構内での調査結果をもとに考えてみたい。

検出した遺構の埋積土は黒色砂で、光構内の北西部に位置する運動場敷地で検出した、6～7世紀の5基の土壌の埋積土と比較してその色調に差異がみられる。また、今回の調査区の北東約130mに位置する中学校体育館敷地では、遺物包含層である黒褐色砂礫層から縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、歴史時代土師器、瓦質土器など、縄文時代晩期から鎌倉・室町時代にかけての遺物が出土している²⁾。出土遺物は須恵器、土師器が圧倒的多数を占めており、須恵器の坏蓋は口縁部にかえりをもつものや天井部に擬宝珠や低い円

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査

Tab. 2 出土遺物観察表

法量 () は復原値

| 番号 | 器種 | 法量 (cm) (①口径②底径③器高) | 色調 (①外面②内面) | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|----|---------|------------------------|-----------------------------------|------|----|-----------|
| 1 | 土師器 台付皿 | | にぶい橙色 (7.5YR7/4) | 良好 | 良好 | |
| 2 | 磁器 碗 | | 素地白色 釉調灰白色(5Y2/8) | 良好 | 良好 | |
| 3 | 磁器 碗 | ①(11.8) | 素地白色 釉調灰白色(N8/0) | 良好 | 良好 | |
| 4 | 磁器 碗 | ①(10.8) | 素地白色 釉調灰白色(N8/0) | 良好 | 良好 | 3と同一個体下か? |
| 5 | 磁器 皿 | ①(12.7) | 素地白色 釉調灰白色(N8/0) | 良好 | 良好 | |
| 6 | 陶器 鉢 | ①(19.2) | 素地橙(2.5YR7/6) 釉調灰白色(2.5Y7/1) | 良好 | 良好 | 唐津系 |
| 7 | 土師器 坏 | ①(17.1) | ①灰褐色(5YR4/6) ②明赤褐色(5YR5/6) | 良好 | 良好 | |
| 8 | 土師器 皿 | ②(4.6) | ①にぶい赤褐色(5YR4/6) ②にぶい橙色(5YR6/4) | 良好 | 良好 | 糸切り底 |
| 9 | 土師器 皿 | ②(6.2) | ①橙色(5YR6/8) ②橙色(5YR7/6) | やや不良 | 良好 | ヘラ切り底 |
| 10 | 土師質 鍋 | | ①にぶい橙色(5YR7/3) ②浅黄橙色(10YR8/4) | 良好 | 良好 | |

盤状の撮みをもつものが含まれていることから、主体となる時期は古墳時代から平安時代頃までと考えられる。したがって、今回検出した遺構は光構内での主体となる時期、埋積土の色調などから奈良時代から平安時代頃のものとしておきたい。

遺物包含層からは歴史時代土師器の坏・皿、土師質土器の鍋、施釉陶器の鉢、磁器の碗・皿などが出土したが、量的には少ない。時期的にも中世～近世にかけての遺物が混在している。このうち、歴史時代土師器の皿は光構内の背後に位置する峨嵋山の山頂付近に立地する月待山遺跡から特徴的に出土していること³⁾から、中世の遺物は二次的な流れ込みによるものと考えられる。

[注]

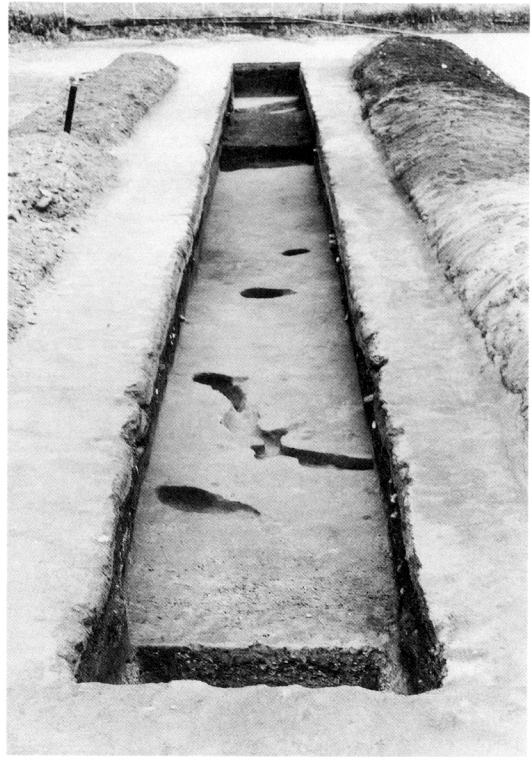
- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報 X』、1992年)。
- 2) 福本幸夫編著「御手洗遺跡」(『先原史時代の光市』、光地方史研究会、1966年)。
- 3) 福本幸夫編著「月待山遺跡」(『先原史時代の光市』、光地方史研究会、1966年)。



光構内(教育学部附属光小学校・同光中学校)全景(北東から)



(1) 第4層上面遺構検出状況(北東から)



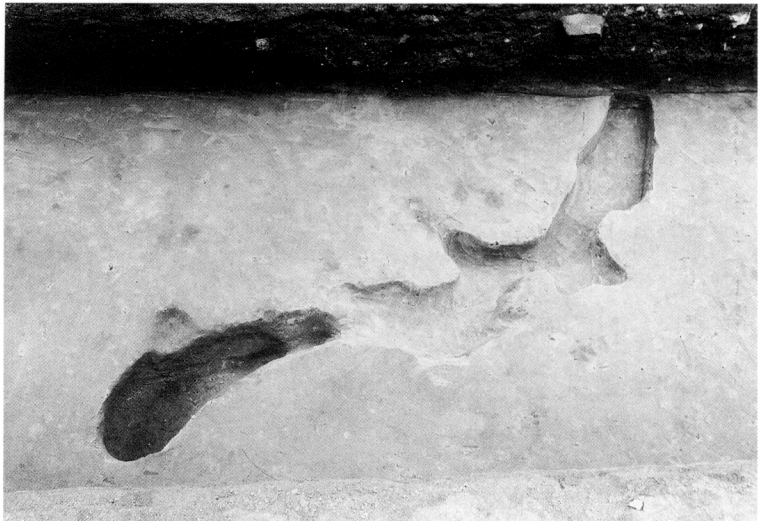
(2) 第4層上面遺構完掘状況(北東から)



(3) 第4層上面第1号土坑(西から)



(4) 第4層上面第2号土坑(西から)

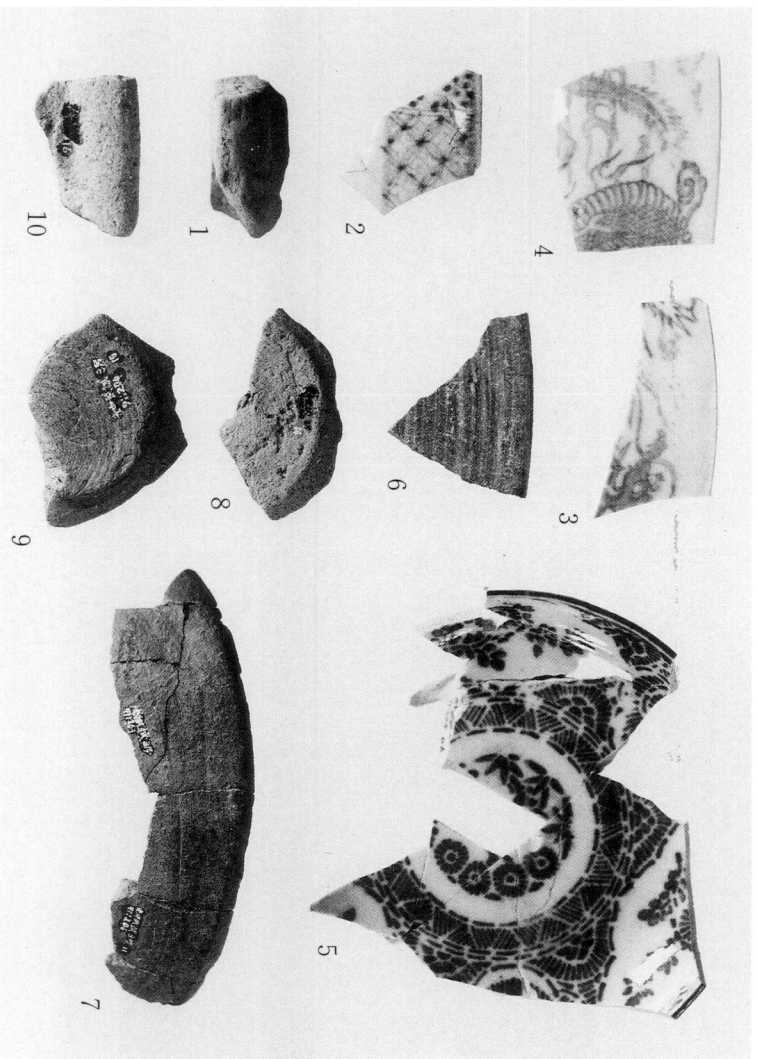


(1) 第4層上面溝状遺構(南東から)



(2) トレンチ中央部北壁土層断面(南東から)

光構内教育字部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査



(3) 出土遺物